

## 現場からの報告

### 国語科と国語課

野村敏夫

昨年、都立高校から文化庁の国語課に移った。国語課は文部省の六階にある。国語審議会の事務局であり、国語問題研究協議会（全国の小・中・高の先生方、指導主事の方などで、国語問題について協議する会）や国語施策懇談会（識者の方々から御意見を伺う、いわゆる一日国語審議会）を主催し、「文化庁ことばシリーズ」や、ビデオテープシリーズ「美しく豊かな言葉をめざして」を作成している。国語課の中には日本語教育係もあり、そちらは外国人に対する日本語教育を扱う。

平成七年十一月八日、第二十期国語審議会は、「新しい時代に応じた国語施策について（審議経過報告）」を、文部大臣に提出した。新聞やテレビなどでは、いわゆる「ら抜き言葉」に関することが大きく取り上げられたが、それはこの報告の中の半ページ強に過ぎない。報告は、「言葉遣いに関すること」「情報化への対応に関すること」「国際社会への対応に関すること」の三つの柱から成り、三十ページ近くに及ぶ。

国語審議会は戦後、漢字表や仮名遣いなど表記のを中心

審議を進め、それらは内閣告示・訓令として実施に移されてきた。現在では、情報化・国際化等の社会の変化を踏まえ、広い視野に立って国語の問題全般を対象に審議しており、必要な事柄について、提言や指針を逐次打ち出していくことになろう。

さて、平成七年四月に実施した文化庁の「国語に関する世論調査」によると、73・6%の人が「今の言葉は乱れている」とし、65・6%の人が「学校における国語の教育をより充実させることが必要だ」と考えている。言語生活の改善について、学校教育に對する国民の期待は大きい。新しい時代に応じた言葉遣いや国語力の在り方、言語環境としての学校の在り方などについて、学会でも研究が進められることを期待したい。

ところで、国語課には一般の方からの国語に関する電話による問い合わせが、毎日のように寄せられる。言葉の意味や漢字の読みを安直に尋ねてくる人も多く、自分個人の意見に対して「御墨付」をもらって他に対しようとするような人もいる。分からないことをなぜ自分で調べて解決しようとするのか、なぜ自分の意見を主体性を持って「私はこう考える」と主張しないのか、と思わずにはいられない。自己教育力の育成は現代の教育課題の一つである。自ら情報を収集し、分析し、主体的に判断していこうとする基本姿勢や力が養われるような国語の授業も、更に追求される必要がある、と感じている。

国語科の教師として十数年にわたり養った現場感覚や生徒観を大切にしつつ、現在国語課に在ることによって得られる行政的な視野や全国的な情報などを生かし、言語観や教育観を磨き、国語

や国語教育についての考えを深めていければと思っている。

(文化庁文化部国語課)

## 現場からの報告

塩澤 寿一

昨年四月より勤務を始め、あつという間に一年が経とうとしている。過去に三校ほど勤務したがこれほど行事の多いところは初めてである。中間・期末の考査はもとより、休みあけには課題テスト、月一回の朝礼、新入生歓迎会に部活動紹介、修学旅行、球技大会、文化祭・体育祭、遠足・林間学校、校外学習、文化講演会、音楽鑑賞会、演劇鑑賞会、生徒総会、役員選挙、社会見学会、スキー教室、学祖を偲ぶ日のほか、教育実習生を学部からと短大からと別日程で受け入れ、ほぼ毎週、何かしらの行事のある中で、毎週職員会議と学年会を開くといった充実ぶりである。さらに部活動の指導も練習試合、大会と、これでもかと時間を吸い取ってゆく。生徒たちはそんな中で激しく急速に成長しつつ、学業にも才能を発揮している。専任教員としての仕事はかように甚大であり、自分の能力以上の仕事をしているのではと錯覚さえおこす。

本当の超能力者は、実験をする博士の方であるという説を聞いたことがある。超能力者と呼ばれる人々が実験室で十分な訓練を

積み、いざ公表しようと一人になると能力が出ない。いくら繰り返してもできないが、いつもの実験室に戻ると超能力が現れる。何のことはない、能力者は博士の力によって超能力を出させられているわけで、本当の超能力者は、被験者の能力を過剰に引き出す博士の方であるという話だ。

我が身を省みて、果たして生徒の能力をうまく引き出せているかどうか、はなはだ心もとない。なにしろ本校勤務は一年目であるから、中高一貫の生徒たちの方がほとんどの面で先輩面をする。私学特有の「校風」に吹きさらされ、立っているのがやつとである。こちらの考えを示せば「それは早稲田のやり方だ」と拒絶される。松山に来たつもりはないのだがと「坊っちゃん」に親しみを感じ、男性というだけでうとまれて、あいさつどころか、すれ違いざまによけられる始末である。およそ花園とはほど遠い、イバラの園で往生しているといったところだ。

それでも希望の灯はある。面白いのは、こちらの個性を出せば出すほど、反応がある。すなわち生徒に迎合するのではなく反発すればするほど、そこには第三の教育現場とも言うべき、新鮮で活気ある空気が生まれてくる。教える―教わるのではなく、勉強する―させられるのでなく、学問を通じて互いの人間性を学び合う、そんな瞬間がある。やはり教育の原点とはこうした現場にあるのだ、と最前線に立っている喜びを実感している。

最近生徒から「先生はとでも早稲田らしいですね」と言われた。七年の在学期間で得た、「早稲田」なるものが、もしかしたら私に、能力以上の仕事をさせているのかもしれない。

生徒という原石を宝石に磨きあげるべく、他山の石としてこれからも学んでゆこうと思ふ。ほんの微風ではあるけれども、今日も早稲田の風を興しつゝ、私は走り続けている。

(大妻中学高等学校)

## 女子校の現場から

北川 久美子

私の勤務する高校は、首都圏にある私立の、一クラス四十五人、一学年十六クラスというマンモス女子校である。中学校も併設されているため、初めての全校集会ではその数の多さに圧倒されてしまうほどだった。彼女たちの卒業後の進路は、四大に二割弱、短大に五割、専門学校に二割弱、と進学希望者が多い。そのためか授業も比較的よく聞かし、生徒指導も厳しくなされている。教員数は、高校に約八十人、うち女性は十九人である。自身自身の高校時代（公立共学）と比べてみると、若い女性の先生が多くともうらやましく思っている。

さて、その若い女性の先生の一人(?)として、生徒に個人的な質問をされることもある。たとえば、昨年私は結婚したのだが、職場では名字を変えていない。「どうして?」ほとんどの生徒がそう尋ねる。そして「旦那さんのこと愛してないの?」という質問が続く。たいていは「そんなことで変わる愛情じゃない

の」と軽くないなして終わらせてしまうのだが、生徒達にとって、自分たちの固定観念からはみ出している事柄が、不思議でたまらないようだ。実は私自身も、少し悩んでいた。そんな折三年生のあるクラスで、ホームルームの時間に夫婦別姓制度について取り上げられることを聞き、見学させていたのだ。

夫婦別姓制度に対して、賛成反対はだいたい半分に分かれていた。私にとって印象に残ったのは、反対派の生徒の発言である。「産まれてくる子供が可哀想」「名字が同じことで、家族の絆が強まるのに:」「家を継ぐ人がいなくなる」「住所の表示や、電話をかけるときに困る」これから世の中に出ようという高校生でも、案外保守的な面があるのに驚いた。そしてそれ以上に意外だったのは、反対派の生徒が賛成派に対して、あまり耳を貸そうとしなかったことだ。賛成派が「自分が別姓にするかはともかく、選択できる自由があるのはよいことだ」という柔軟な意見を示しても、それは同じであった。生徒達にとって、固定観念を覆すというのは難しいことなのかもしれない。だが私は、物事をひとつの角度からだけでなく別の角度から見られるような力が、今の高校生には必要なのではないか、と考えている。夫婦別姓にしても、同姓が当たり前、ではなく、何故別姓が必要とされているのか、といった面から揺るがせてみたい。その身近な教材が私自身である。私は、夫婦別姓の制度には賛成、実際の戸籍をどうするかは思案中だ。ただ、私は名字はどうであれ「○○さんの奥さん」「○○ちゃんのお母さん」ではなく、一人の私自身でいたいと思っっている。私にとっての夫婦別姓はその意志表示なのだ。

これからも、生徒には、「どうして名字変えないの？」と聞かれることだろう。今度は、もう少しまじめに答えてみようかと思う。彼女たちより少し長く生きている先輩として、共に考えていきたい。

(昭和学院高等学校)

## 日本語としての「文学」——北京の現場から——

大川 育子

北京連合大学旅遊学院の日本語学部で、昨年九月より、四年生の「文学」を担当している。

三、四年生ともなると、日常会話はほぼ問題はなく、日本に関するかなりの事情通となっているのだが、文を読む場合、一番ひっかかるのが、外来語と擬態語である。

現代文にはカタカナが氾濫していて、それは増加する一方だ。手許の日中辞典で補いきれないものも多い。無節操につかわれる外来語をカタカナ表記の日本語として次々に覚えていかなければならない学生に同情する。それがどこまで必要なことなのか疑いたくもなる。また、擬態語も難しく、「ガバツと起きる』ってどうやって起きるんですか」といった類の問は絶えない。

中国の学生にとっては、むしろ漢語の多い文学作品のほうが理解しやすいようだ。

新年度の始めに、ウォーミングアップとして「ことばありき」(阿部昭)を読み、続いて「陰翳礼賛」(谷崎潤一郎)を読んだ。

前者は高校の教科書の最初に出ているもので、学習の導入に用いられる。「言葉」と「文字」のあいだで書くことに悩む作家の姿に重ねて、さらに、日本人の言霊思想なども紹介してから、次の作品群につなげたいと考えた。ところが、一見難解そうな後者のほうが、はるかに学生の理解は深く直截的だったのである。

谷崎の漆器に対する独特の美意識は日本的な感覚を代表するものだ。日本人なら誰しも吸い物椀を手にした時の感覚に覚えがある。欧米人の理解の届かない静謐な食の空間を日常においても体験できる。

しかし、これら日本独特と思われるものも、源をたどればその流れの多くは中国に遡る。ほとんどは中国人の生活の背後にかつて存在したものだ。漆器は現在、中華料理の食卓にのけることはないが、漆塗りの茶器や椀が工芸品として売られている。だから、漆器というと彼らは中国の漆器を思い浮べる。両国の漆器を見比べると、似て異なるもので、日本の漆器がいかに独自の技術と美意識で洗練されてきたかが歴然とわかる。「漆器なら家にあります」という人には実際に本物を見せなければいけない、作品の読みまでその時点で変わってしまう。

谷崎の闇への執着、文中に言及している夏目漱石のようかんの色合いへの賛辞(「草枕」)など、周辺の参考資料も合わせて、日本語のテキストとして読む学生の目は、語を一句一句とらえることに巧みであり、自然だった。「支那らしい」「青磁の皿に盛られた青い羊羹は、青磁の中からいま生まれたようにつやつやして、思はず手を出して撫でて見たくなる」(「草枕」という主人

公の審美眼は元来中国のものだった。外国人に日本独特の何もかかを教えるのだと氣負っていた新米教師にとつてはまさに肩透かし、逆に、いかに日本文学が中国文化の落し子であつて真に日本独特のものが少ないかを、教えられることになつた。

だからこそ、中国と日本の相互理解は容易ではない。落し穴があるのだ。漆器も陶磁器も茶道の何たるかも、「知っている」と見做すことで、その先が見えにくくなる。<sup>2)</sup>

次に、「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)を取り上げた。芥川は、漱石、谷崎、川端に負けず劣らず学生に読まれている。語学のテキストとしては平易なほうで、普通、三年生までに扱ふ。「蜘蛛の糸」のテーマは、中国人にはどう映るだろうか。

関心事は、芥川の提示するテーマが、現代中国とどう呼応するかということである。一般に、中国の青少年は、正論正義のかたまりと化す教育を受けている。愛国の徒となるべく、希望に燃えているよつだ。作文を書かせると、善行の例を挙げて「このように、私ももっと努力しなければならない」というような表現でしめくくる。実際に態度にも表れており、私語の多い行儀の悪い教室の風景しか知らない私などは、当初感激して、単純に嬉しがつていた。

しかし、作品の読み方としては単純に見過ごしてはおれない。健陀多の性情は「悪」に尽きるのか。とすると、お釈迦様の下す「勸善懲惡」の構図は確として揺るがず、そこから一步も出ない読みで終わつてしまふ。

芥川は、なぜ、日本で読まれなくなつたのだろう。幸い、現在

新規の全集が刊行中で毎回読み直す機会を与えられる<sup>3)</sup>。日本人の価値観が多様化して、芥川への評価も一様でなくなつていよう、中国人の芥川への読みにも変化があるはずである。

中国は、特に首都北京は急速に街のたたずまいも生活様式も変化している。同時に、人の装いも人情も考え方も変化しているように見える。物が豊富になり、娯楽も増えた。その変化のげげさは現実味を欠くほどで、嘘だ、何一つ変わつてなどない、と折紙のだまし船の帆先を折り返すように、別の方面からの力を加えると、元通りということもあり得ないことではあるまい。

健陀多のまことに人間らしい愚かさ、それに対するお釈迦様の態度……芥川は何を言いたかつたのか。また、「羅生門」における下人の心境の変化、老婆の下人に対する強いまなざし……。「芋粥」における五位のどこまでも惨めな描写、五位に対する利仁の最後まで保つ強大な立場と心持ち……。再考の余地のあるものばかりである。

春節(旧正月)の休暇が終わると、大学は後期が始まる。三月は「羅生門」「芋粥」に入つて、中国人学生と共に考えたい。彼らによつて、日本にはわからなかつたかもしれない読み方を示唆されることを謙虚に楽しみたいと思ふ。

注(1)「現代文」第一学習社 竹盛天雄編

(2)「中国文化は中国文化のコピーである」という考え方が中国人に根強く存在して、日本人のころ、考え方についての理解はまだ遅れているのが現状である。「行き詰まつている西洋文明原理を取り換える新しい文明原理を創造しなければならぬ」。その新しい文明原理の創造には、中日両国文

化の相互理解および刺激は欠かせないものである。しかし、現状のままでは真の信頼関係を築くことも、新しい文明原理を創造することも、難しいであろう。(中国社会科学院日本研究所高級研究員・崔世広 毎日新聞・私見直言(一九九六年二月七日付)。

(3) 「芥川龍之介全集」(紅野敏郎他編纂 岩波書店)

(北京連合大学旅遊学院、在北京)

## 「国語表現演習」考

市毛 勝雄

### 一 論文の書き方を教えよう

大学で国語表現(論・演習)を担当してから、一〇年になる。最初の一年はまだ埼玉大学着任当初で、いろいろと試行錯誤をした。国語科だけでなく、体育、音楽、理科等々すべての教科の学生に必要な国語表現の演習とは、いかなるものか。この課題の答えは難しかったが、考える甲斐があった。そして、一年めが終わる時には国語表現演習で何をやらなければならないか、見当がついた。

その答えは、科学的な論文の書き方を教える、であった。一年めが終わるときに、そばに座っていた学生に「来年はこの講座で、卒業論文の書き方の原理を作文の形式で教えようと思うが、

どうだ？」と言ってみた。するとその学生は「え、わたし、それ採ります」と言う。「だって、同じ講義だから、単位にはならないぜ」「いえ、構いません。卒論の書き方が分かるのだったら、一こまや二こま、何でもありません」

この返事を聞いて、私は大いに手応えを感じ取った。

### 二 論文添削は地獄の苦しみ

翌年、誰も授業をしない水曜日第二時限に国語表現演習を開講した。熱心な学生に受講しやすいようにと考えたのである。教室に行ってみると、いっぱいの子で、教室に入りきれないほどであった。朝早い授業はだれでも苦手である。私は朝早くともやってくる数少ない奇特な学生を相手に、論文添削の苦勞をしたかった。

だが、実際は論文の書き方を学びたがっている学生がたくさんいることを確認することになってしまった。あとに続く添削の苦勞を考えると、熱心な学生の存在を知って嬉しい気持ちが大分暗くなっていった。

だが、ふだん何を考えているのかわからない学生たちが、席を見つめるのに大騒ぎしているのを見て、せっかくながらも朝早くから教室にきたのだ、こいつらのために一年苦勞してやろうか、という気になった。私に、単位は要らないが授業を受けます、と言った学生が前のほうの席に座っていたのも、元氣が出る要素になったようだ。まだ、私も若かったのである。

それからの一年間は、論文添削の戦争であった。おかげで、論

文を読むのも、添削の赤ペンを入れるのも速くなり続けている。論文を提出させた翌週に返すのが、添削の効果もあり、処理にも気合いが入る。返却を一週間先に延ばすと、気持ちもゆるみ、仕事量も二倍に増えるから地獄の苦しみとなる。その苦しみを抜けたすために、そして学生達が成果を受け取るときの表情を見るたのしみのために、ひたすら添削を続けたのである。

### 三 論文指導の要点

論文指導を通算一〇年、わが早稲田大学教育学部で指導を始めて、早や一年経った。手応えは十分である。ここで論文指導で気がついた点を列挙してみる。各項末の(添削)印は、論文添削のときに私が着目する箇所である。

- 1 論理的な文章指導の要点は、文章構成の基礎を教えることにある。理論的根拠を抜きにして、初めに「はじめ・なか(具体例)・まとめ・むすび」という構成の役割を教える。
- 2 四〇〇字作文を「友人」のテーマで書かせる。(テーマ・字数は一年で3回グレードアップする)「はじめ」を2行、「なか」は具体例二つを7行ずつ14行で書き、「まとめ」は2行、「むすび」を2行で書く。
- 3 「なか」の具体例は、一つの場面を一段落で、それを二つ詳しく書く。ここを目に見えるように描写的に記述するのが、論文の表現技術で一番難しい。(添削)
- 4 「むすび」に関係の深い具体例を選ぶのが、二番めに難しい。(添削)

5 慣用句を乱用する害を知らない学生が多い。慣用句を乱用すると、文章が粗く、下品に、かつ俗っぽくなる。(添削)

6 初心のうちには、「はじめ」の中に結論的な文章を書いてしまう例が多い。こうすると文章は先が見えてしまい、後に続く文章は退屈な証明を長々と述べるだけの役割になる。「はじめ」は「なか」のあらましを紹介するだけにとどまるのがよい。(添削)

7 各段落には、内容を代表する一語(キーワード)を意識的に記述する。

8 具体例を二つ並べるとき、効果の大きい例は後に置き、効果の小さい例は前に出す。竜頭蛇尾にならないため。

9 添削の度に「上中下」の評価をする。特注した大型の花判を捺してやる(小学生みただ)のが最も効果的である。

10 一度でも「上」を取った者には、評価として「上」を付ける、と言うと学生は最後まで希望をもって努力する。私の実際例では一〇年間で80%の者が「上」となった。参考までに記すと、3回の添削まで全員が「下」、4回めに3〜4名の者が「中」となる。このときに、良い論文を筆者名を伏せてクラス全員に音読して聞かせると、次回からは全員急速に文章が上達するのが常であった。

### 四 論文はだれにも書ける

文学作品の文章は評価の観点が多様で、一通りの基準が立てられない。しかし、論文は構成・文章等の基準がシンプルで、明快で、努力すれば誰でも書くことが可能である。



早稲田大学教育学部の諸君全員が明快な論文が書けるようになり、卒論・修論を易々と書き上げて社会に飛び出して行かれることを心から祈るものである。  
 (早稲田大学)

第十一集（一九九一年六月）目次

教材としての更級日記	山崎賢三
——作品の一部分を扱う場合——	
なぜ国語教師は日本語が教えられないか	
『無名抄』における新教材の発掘 (一)	細川英雄
教材研究・井出孫六『十石峠——	小林保治
秩父事件と地図(長野・群馬)』	深澤邦弘
『一銭銅貨』を読む	中村良衛
〈実践報告〉	
書写指導にあたって思うこと	松川忠雄
生涯学習通信講座で自分史を担当して	大島京子
言語技術教育について	岩崎淳
——事実と意見を中心に——	
〈書評〉	
町田守弘著『授業を開く』を読んで	中村献作
——授業を創造する側の論理——	
〈現場からの報告〉	
山口 毅・茨城 健・山村文人	
例会発表要旨	